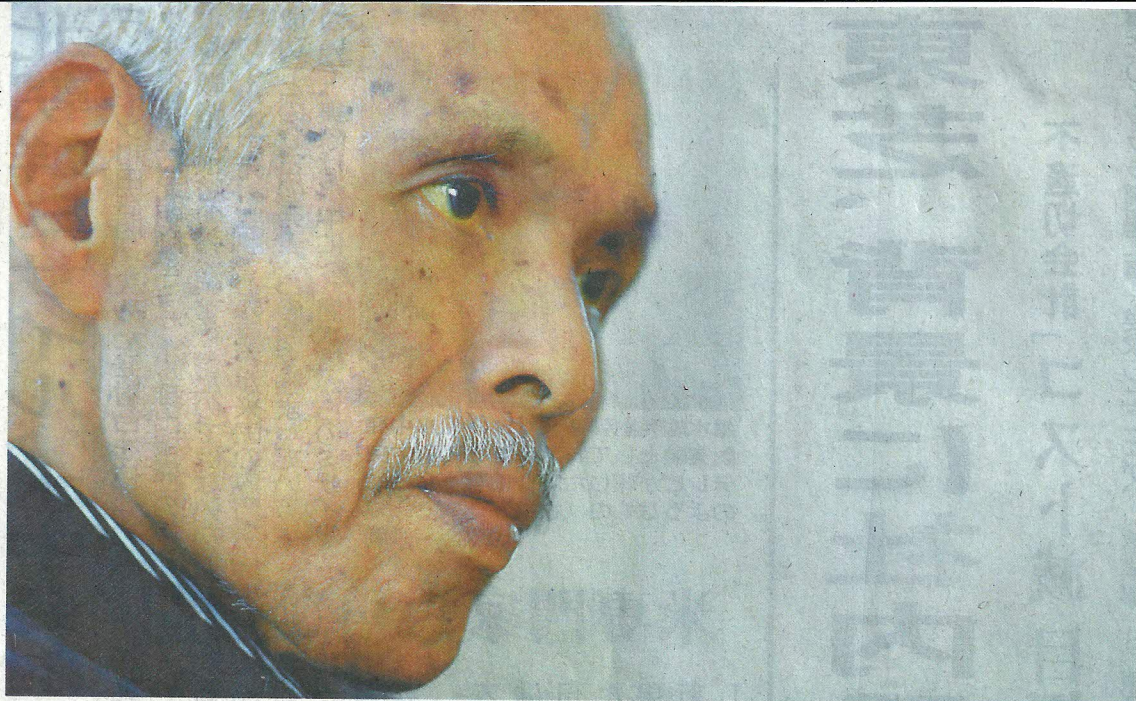


戦争、災害…失われて気づく



亡くなる前日、インタビューに応える詩人の長田弘さん
＝東京都内で2日、竹内幹撮影

「日常」を愛して

5月3日、胆管がんのため75歳で亡くなった詩人の長田弘さん。逝去の前日、毎日新聞のインタビューに応え、刊行されたばかりの「長田弘全詩集」（みすず書房）に託した思いを語った。やさしく静かな詩人の言葉は、揺るぎない「日常愛」の信念に支えられ、それが最後のメッセージとなった。【井上卓弥】

2日午後、東京都内のお宅を訪ねた。ソファに腰掛けた長田さんはじっと目に見えない何かを見つめるように、一語、一語話し始めた。「最近、愛国心という言葉がよく使われますね。でも、パトリオティズムという外国語は、欧米では生活様式への愛着を指す言葉です。何か高揚したナショナリズムのように、愛国心と訳すのは正しくないと思うんです」

パトリオティズムという外国語は、欧米では生活様式への愛着を指す言葉です。何か高揚したナショナリズムのように、愛国心と訳すのは正しくないと思うんです。長田さんが残された時間と力を注いで書き下ろした「全詩集」巻末の「場所と記憶」には、こうある。ハパトリオティズムとい

死の前日 長田弘さんの信念

おさだ・ひろし 1939年、福島市生まれ。「私の二十世紀書店」で毎日出版文化賞。詩集「幸いなるかな本を読む人」で詩歌文学館賞。昨年、詩集「奇跡—ミラクル—」で毎日芸術賞を受賞した。

ペイン市民戦争(36〜39年)の痕跡を訪ねている。先の大戦で大きな空襲被害を免れた故郷・福島は4年前、戦後最大の震災に見舞われた。

「場所と記憶」にはもう一つ、詩人の原点を示す一節がある。ハ一九六〇年、詩を書き

量だ。▽「日常愛」とは何か。「それが生活様式への愛着です。大切な日常を崩壊させた戦争や災害の後、人は失われた日常に気づきます。平和とは、日常を取り戻すことです」。時折、声を詰まらせながらも、絞り出すように話し続けた。

長田さんは1960〜70年代、アウシュビッツやス

はじめる。…第一次大戦で戦死したウィルフレッド・オウエンの詩を知り、オウエンの「詩はオウエンのうちにある」という詩に対する態度に、決定的な影響を受ける。▽

82年刊行のエッセー「私の二十世紀書店」もオウエンの詩で締めくくられている。大戦終結の1週間前、25歳のオウエンは西部戦線

で亡くなりましたね。日常は普通、哀れみと訳されますが、私は失われたものへの愛情と考えてきました。しばらく黙ったまま、33年前の本に視線を落としていた。

「全詩集」には、日本軍兵士の陣中日記を引いた詩も収められている。ハ「……／焼きのり、焼塩、舐め味噌、辛子漬、鯛でんぶ、牛肉大和煮……」／戦争にいった男の遺した、戦争がくれなかったもののリスト。▽

「戦争はこうして、私たちの生活様式を裏切っていました。こういう確固と

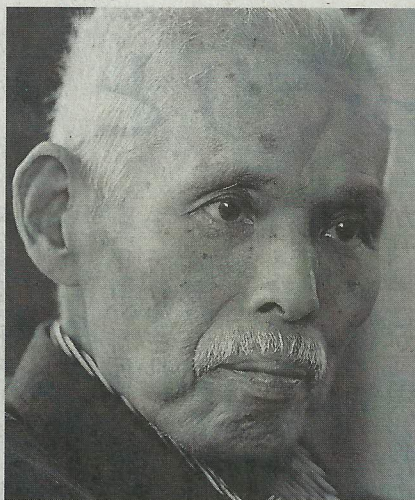
した日常への愛着を、まだずっと書き続けたかった。戦後70年の今、失われようとしているものがいかに大切かということ……」

別れ際、長田さんは「窓を開けると、風の音や誰かの声、新聞配達音——そういう日常が聞こえてくるんです」とつぶやいた。その口調は穏やかだった。

寄稿 池辺晋一郎 (作曲家)

普通の言葉で世界描く

詩人、長田弘さんを悼む



東京都内で毎日新聞の取材に応じる長田弘さん—2日、竹内幹撮影

詩人の長田弘さんの訃報が届いたのは、この5月10日だった。逝去されたのは3日で、すでに近親者による葬儀がおこなわれた由。がんで闘病されてきたことも知らな

かった。ただただ驚き、ただただ悲しみに浸るのみであった。元来僕は詩を読むのをこよなく愛する人間で、書棚は詩集だらけ。秋原朔太郎、中原中也、立原道造など過去の詩人のものに現代詩集も並ぶが、背表紙に長田弘とある何冊かがそこそかなりのスペースを占めている。

詩集『世界はうつろくし』をみると、長田さんが語りかけてくる。「窓の話をしよう」「窓のある物語」と。——「こゝろが信じられない日は、窓を開ける。

（中略）そうして、目を閉じる。／十二数えて、目を開ける。すると、／すべてが、みずみずしく変わっている。詩を読む者の心に、初々しく新鮮な風景が映る。しかし長田さんは、何ひとつこちらへ押しつけてこない。「人と話すことは、喋ることではない。人の言葉のなかにある沈黙を受け取る、ということだ」という長田さんの言葉に僕は同意するが、事実その言葉は「話をしよう」と言いつつはるかな地平を見渡し、ひたすらな静謐さを保つのである。

一昨年僕は、ソプラノとバリトンの独唱とオーケストラのために「交響曲第9番」を書いた。長田さんの9篇の詩による9楽章だ。「水があった。／大いなる水の上に、／空のひろがりがあった」(「世界の最初の一日」)で始まり、「いつの年も、春のはじまる日だ、／(中略)わたしは一人なのではないと感じるのは」「春のはじまる日」(「春のはじまる日」)で終わる。終わり近くに「幸福は何だと思っか?」「(同)という一行が2人の歌手により何度か語られるが、それは、イントネーションどおりの器楽によっても繰り返される。長田さんの詩には特殊な難解な語は全く登場しない。「言葉は私有財産のように自分で私有できるものではなく、誰もが共有できる、しごく公平なもの。誰のものでもない、誰のもでもない、ずっと……」

長田弘さんとは2度しかお会いしていない。だが、その故郷・福島県の平田村立ひらた清風中学校校歌を自分が作詩するから作曲してほしいと依頼があった。まもなく詩が届き、その平田村を僕も訪ねようとしていた矢先の訃報だった。僕は今、長田さんの言葉をひたすら反芻する。この言葉をこんなふうには実感することがあろうとは予想しなかった、と感じながら。「亡くなった人が後に遺してゆくのは、その人の生きられなかった時間であり、その死者の生きられなかった時間を、ここに在るじぶんがこうしていま生きているのだ」(いけべ・しんいちろう)

詩人の長田弘さんは3日、胆管がんのため死去。75歳。